

# 対比のハをめぐって

窪田悠介（国立国語研究所）

## 1 本発表の主な論点

問題意識:

- 形式意味論などの理論言語学研究と、日本語の記述研究との有益な分野の交流のためには何をすることが有効か?
- 形式意味論研究者の立場から、最近の自分の研究を通して実地に体験したことを報告する
- 第25回大会パネル「「よい」文法記述」について考える」(企画: 三好伸芳) に触発された
  - － 他分野との交流
  - － 研究実践に関するメタ的な考察

経緯、今日の話の要点:

- 日本語には意味論研究に対して貢献しうる重要な現象がいろいろある
- これらの現象に関する記述的研究の蓄積も豊富である
- だが、分野外の研究者にとってこの記述的研究の蓄積はアクセスしにくい側面がある
- 形式意味論研究者として、具体的な現象 (対比のハ) の分析を進める際に直面した問題に関して報告する
- 形式意味論と日本語学は、異なる研究伝統に根ざしており、研究の目的も異なっている
- どのような研究がどのような関連性のもとでまとまりを成しているかが大きく異なる
  - － 形式意味論: 意味的な概念や、言語普遍的な法則性の探求
  - － 日本語学: 品詞・形態や特定の語彙項目群
- 関連研究の間の関係性を分野横断的な方法で整理する方法はないか?

## 2 対比のハ

### 2.1 無知の含意 (ignorance implicature)

- 対比のハは無知の含意 (ignorance implicature)を誘発する ( Hara (2006), Tomioka (2010)) (寺村 (1991)なども参照)

1. 明日のパーティーには、花子は来るだろう。→ 花子以外については来るかどうか話者は知らない

cf.: 選言

2. 昨日のパーティーには、太郎か次郎が来るだろう。→ どちらかが来るか話者は知らない

- Hara (2006) の分析 (概略):
  - 対比のハは代替集合を想起させる (花子、道子、太郎、次郎、...、花子+道子、花子+道子+太郎、...)
  - 話者は1を発話した
  - 代替集合を用いて、より強い発話が出来たはずである
  - より強い発話をしなかったのだから、話者の知識は1に限られる
- Griceの会話の含意とfocus semanticsを組み合わせた説明

## 2.2 対比のハの「含意」

- 対比のハの含意は「無知」に限らない。(cf. Sawada (2012); 英語の *even* のスケール含意)
- 3. 銅メダルは取りたい (願望)
- 4. 銅メダルは取れるよ (可能)
- 5. (警察や先生はともかく) 親には相談すべきだ (義務)
- 6. どこに進学するのでも、英語は勉強しておいたほうがいい (目的論的)
- 7. (私と夫は殺してもいいが) 子供は助けてやってくれ (命令・依頼)
- speech act未満の「何か」の強さに関連しているように思われる
- 対比のハの含意は信念に埋め込める
- 8. 花子は太郎は試験に受かると思っていたらしい。
- 9. 花子は (フランス語や中国語はともかく) 英語は勉強し直したいと長年言っていた。
- 「無知」に限らず信念に埋め込める、この手の「含意」を会話の含意から導出できるかは自明ではない
- 可能性や望ましさに関する、当該文脈で会話参与者間で共有されている、何らかの評価・想定に関係する序列が関与しているように思われる

## 2.3 分析 (途中)

- 「 $x \wedge P$ 」の意味 (Kubota and Ido (2025))
  - 主張:  $P(x)$ 
    - \* ただし、 $P(x)$  は「裁量命題」(discretionary proposition) (Coppock (2018))
    - \* 裁量命題: 客観的事実がすべて定まったあとでも、なお真偽が確定しない命題
  - 前提:
    - \* 当該文脈における $x$ の対比集合の要素 $y$ すべて( $x$ を含む)に関して $P(y)$ が成立することを論理的に含意する、命題 $\phi$ が存在する。
    - \*  $\phi$ を共有知識として認めるかどうか、会話参与者の間で審議中である。

## 2.4 問い

- この「評価の序列」の正体は何か?
- 関連する他の現象はあるか?

### 3 関連研究を探す

#### 3.1 形式意味論

- 形式意味論の研究においては、意味的な特徴や理論的な概念を中心に研究が進む  
e.g.: 無知の含意、スケールの含意、談話構造、代替集合 (cf. 大島 (2025))

対比のハの含意と関係がありそうな意味現象の例:

- 前提・投射の意味 ( Tonhauser et al. (2013), Potts (2005), Abrusán (2023))
  - 「評価の意味」は真理条件から独立しているか、その正確なステータスは何か?
  - 関連する問い: 前提投射、既知性などの性質を細かく調べる
- スケール性・極性 ( Israel (1996), Horn (2017))
  - *even* の研究で言われている ‘expectation scale’ のようなものとの関係性? (*even* の含意は「前提」なのかそうではないのか?)
  - 関連する問い: 極性表現の認可条件は意味論的か、語用論的か?
- 焦点、対比 ( Buring (2003), Greenberg (2018), Chen (2024))
  - 焦点の解釈との関係、代替集合の役割
  - 関連する問い: 他言語の類似現象 (英語の音調によるContrastive Topicや、他言語の *even*, *at least* などの語) との関連は? 例: ヒンディー語の *=to* ( Deo (2022))
- 談話構造 ( Roberts (2012), Farkas and Bruce (2010))
  - 対比のハの本質的機能は「留保」「(談話戦略としての) 和らげ」だと思われる
  - 関連する問い: 談話構造のモデルの中でこのような談話戦略的性質を捉えることができるか?

いくつかの特徴:

- 個別の現象に対して複数の切り口があり、それらがお互いに関連している
- 「前提」などの専門用語や概念については、一応の合意が存在する (もちろん、常に批判的精査がされ続けている)
- 理論的な概念の解明が主眼であり、個別の現象の詳細・完全に正確な記述自体を目指しているとは限らない

#### 3.2 日本語学

##### 3.2.1 寺村 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』

「XハP」における「ハ」の基本的な機能は、「XについてPである」ことを言うのと同時に、「～Xについて～Pである」ということ (影) を暗示し、その影との対比的な意味を生じさせるところにある。(寺村 (1991), p.41)

- 「(影)を暗示」は「評価」や「想定」のようなことと関連しそうだが、定かでない
- 「(影)を暗示」する現象というのは他にあるのか?
- (寺村 (1991)の意味での) 「対比的」な意味を表す現象というのは他にあるのか?

### 3.2.2 (隣接分野の研究者としての) 戸惑い

ここから先が難しい。

- 評価的・談話的現象を名指す一般的な用語・概念が存在しないように思われる
- そのため、以下のような (理論研究者がほとんど無自覚にやっている) 論文のネットワークの探索手法が使いにくい
  - － 「そういえばこれって最近巷で流行ってる無知の含意 (ignorance implicature) と似てくない?」
  - － 「これ、前提っぽいけどなんか違う感じもするんだが一体何なんだろう? そういえば投射的意味 (projective meaning) の例の怪しげな議論ってどこまで進んでたっけ?」
  - － 「談話構造といえばRobertsのQuestion Under Discussion (QUD) 理論が有名だが、最近あれを使って談話標識の研究とかしてる人っているんだろうか?」
- 個別の語彙項目に関する研究は探せばたいてい見つかる。だが用語の問題が立ちはだかる
  - － それぞれの現象の特徴の記述が、論者独自の用語によってなされている
  - － 「前提」のような理論の文献で定着している用語と文字面が同じ用語が用いられている場合、理論的な概念と必ずしも同一でない

### 3.2.3 いくつかの具体例

工藤 (1977) 「限定副詞の機能」

10. ばかに若くみえるね。少くともハワイあたりから帰つて来た手品師くらみには踏めますぜ。

[10.] の「少くとも」は、「ハワイあたりから帰って来た手品師」や「二三度」の部分で、〈最低限の見積り〉として取りだすことを表わしている (工藤 (1977/2016), p.91; 強調引用者)

森本 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』

11. 練習しても、練習しなくても、どうせジョンは勝つだろう。

「どうせ」は、次のような、話し手の認識を担う。[1] ある行為に関係する現在の状況に、ある一定の判断評価を与えられるということ。...[3] この既定性を前提にすると、対応可能なことの範囲は限定されているということ (森本 (1994), p.129; 強調引用者)

沼田 (1986) 「とりたて詞」 (『いわゆる日本語助詞の研究』)

12. A. 君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう。 B. いや、ビールくらい飲むよ。

[12.] の「くらい」は「ビール」を自者としている。そしてAの / (2) ビールも、ビール以外—例えばウィスキーやウォッカなどの強い酒—も飲まないだろう。 / という否定的な評価に対して、「他の強い酒は飲まなくても」最低限の「ビール」は、 / (3) ビールを飲む。 / と自者を述語句「飲む」に対し肯定するのである。従って、...他者否定という期待を含みとする (沼田 (1986), p.210, 原文では / の部分で改行; 強調引用者)

寺村 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』

「XナドP」が、「xについてPである(XがPする)ことが、真実、あるいは自分の思いからとんでもなくかけはなれたことだ」ということを表すとして、そのような発話を動機づけるものとしてどういう状況が考えられるだろうか。これまでの多くの例を見返して考えてみると、話し手の頭のなかになにか非常に＜高い存在＞があって、それとの関連で、Xのように＜低い＞ものがPすることが思いもよらないことだ、というのが典型的な場合のようである。(寺村 (1991), p.188)

13. こんな奴、坊主なんかじゃありませんや。(→\*坊主なんかです)
14. 貧乏人の俸は、大学なんか卒業できないからな。
15. 匂いのない生物なんかあるはずはないんだが。

澤田 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』

定義3: 「EXPECT値」(EXPECT値をE値と略すことがある)

「EXPECT値」とは、話し手が、表現時以前の聞き手との共通知識から、対照集合の要素が、命題関数を満たすことに関して、期待・予測する主観的な評価の度合である。話し手は、聞き手も同様のE値をもつと仮定する。「EXPECT 値のスケール」とは、対照集合の要素を EXPECT 値の大きい順から小さい順に並べた順序集合である。(澤田 (2017), pp.15-16)

定義4: PREFER値 (PREFER値をP値と略す場合がある)

「PREFER値」とは、話し手が、話し手自身の価値判断によって、提示した要素がその文脈で問題となっている命題を満たす要素として、適切であると評価する度合いである。話し手は聞き手が同様のP値を持つとは仮定しない。PREFER値のスケールとは、話し手が対照集合の要素をP値の大きい順から小さい順に並べた順序列である。(澤田 (2017), p.146)

井戸 (2023) 『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』

態度表示タイプのナド・ナンカ

態度表示タイプの「Pナンカ/ナド Q」は、先行文脈で導入された命題「PがR」を参照して、認識主体がPについて、「Rするのに不適切である」「Rしない／すべきでない／してほしくない」という趣旨の否定的態度を、Qを用いて表示しているときに用いられる。(井戸 (2023), p.66; 強調引用者)

3.2.4 ここから見えてくること

用語の乱立とテストの不在

- 「見積り」、「話し手の認識」、「既定性」、「期待」、「価値判断」、「否定的な評価」、「適切であると評価」、「否定的態度」...
- 操作的テストが与えられることは稀 (cf. 前提投射テスト、否定極性下方含意テスト)

- 品詞別、あるいは語群別に研究がまとまりを成している (?)
  - － 品詞分類を横断する形で研究が行われることは極めて稀
  - － 例: 談話構造を参照した「評価的意味」に関する知見は、文献の海の中に細切れの形で散在。品詞に分断され、さらに個別の項目に分断されている。
    - \* 副詞: 「所詮」「やはり」「結局」「まさしく」(工藤 (1977)、森本 (1994)など)
    - \* 取りたて詞: 「くらい」「なんか」「こそ」(沼田 (1986)、安部 (1999)、澤田 (2007)、井戸 (2023)など)

## 考察

- 用語の統一や操作的テストの強要は、分野のあり方を考えると現実的ではない?
- とはいえ、基本的な概念や用語があまりにも属人化されていると、若い世代や異分野からの参入障壁となる
- 特に以下の点でハードルが高い
  - － 個々の研究の関連性が見えにくい
  - － 分野全体としてどういう営みを行っているのか、何がゴールなのかが分かりにくい

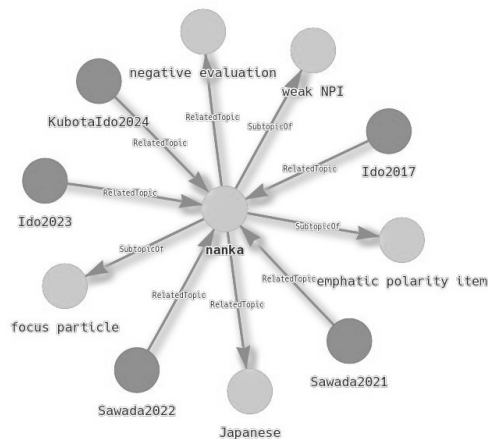
## 提案

- 現象の緩やかな一般化のレベルである程度のまとまりを作ることができると見通しが良くなるのではないか?
- 個別の現象と用語を紐付け、用語同士も関連性を明示的に紐付けることができれば、ミッシング・リンクの発見につながるかも

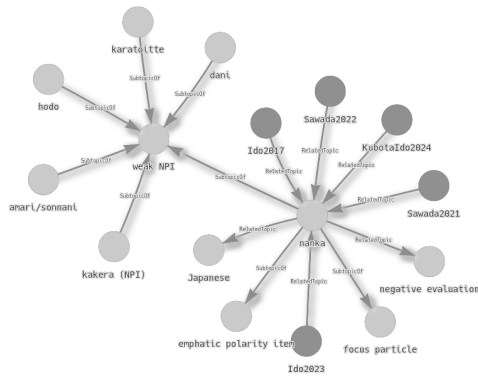
## 4 GrammarXivの可能性

事例: ナンカの極性的な意味について

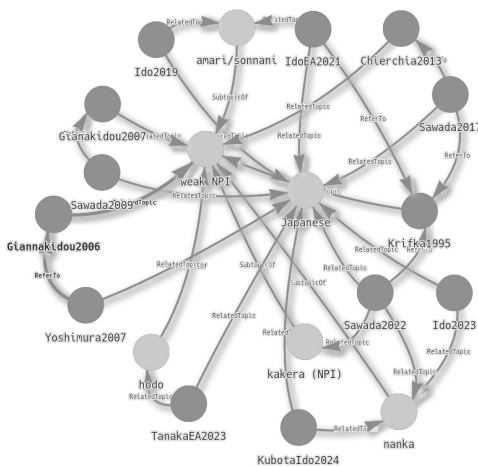
「ナンカ」という特定の語彙項目と文献、現象群、一般化との対応



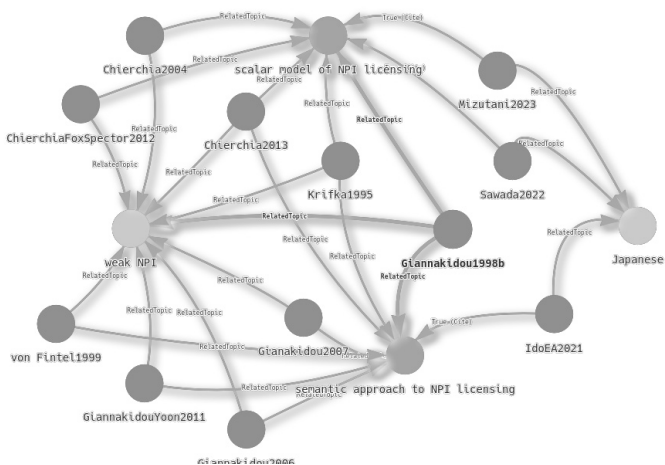
現象名「weak NPI」から、関連する語彙項目をたどる



現象名「weak NPI」と言語名「Japanese」で関連文献を絞り込む



現象名「weak NPI」と言語名「Japanese」で関連する仮説を探す



## 参考文献

- 安部朋世. 1999. 「『とりたて』のクライ文の意味分析」『筑波日本語研究』4, 1–15
- Abrusán, Márta. 2023. The perspective-sensitivity of presuppositions. *Mind and Language* 38:584–603.
- Büring, Daniel. 2003. On D-trees, beans, and B-accent. *Linguistics and Philosophy* 26(5):511–545.
- Chen, Yi-Hsun. 2024. Ignorance and concession with superlative modifiers: a cross-linguistic perspective. *Linguistics and Philosophy* 47:361–400.
- Coppock, Elizabeth. 2018. Outlook-based semantics. *Linguistics and Philosophy* 41:125–164.
- Deo, Ashwini. 2022. Could be stronger: Raising and resolving questions with Hindi *=to*. *Language* 98:716–748.
- Farkas, Donka and Kim Bruce. 2010. On reacting to assertions and polar questions. *Journal of Semantics* 27:81–118.
- Greenberg, Yael. 2018. A revised, gradability-based semantics for *even*. *Natural Language Semantics* 26:51–83.
- Hara, Yurie. 2006. *Grammar of knowledge representation: Japanese discourse items at interfaces*. Ph.D. thesis, University of Delaware.
- Horn, Laurence. 2017. *Almost et al.*: Scalar adverbs revisited. In C. Lee, F. Kiefer, and M. Krifka, eds., *Contrastiveness in Information Structure, Alternatives and Scalar Implicatures*, 283–304. Heidelberg: Springer.
- 井戸美里. 2023. 『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』くろしお出版
- Israel, Michael. 1996. Polarity sensitivity as lexical semantics. *Linguistics and Philosophy* 19:619–666.
- Kubota, Yusuke and Misato Ido. 2025. Contrastive *wa* operates on outlooks. Paper presented at the 32nd Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 32), Cornell University, Ithaca, NY.
- 工藤浩. 1977. 「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と言語史』969–986、明治書院 (工藤浩. 2016. 『副詞と文』ひつじ書房に再録)
- 森本順子. 1994. 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 沼田善子. 1986. 「取り立て詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 大島デヴィッド義和. 2025. 「現代日本語の尺度的累加量化詞について: 類推・添加・最低条件用法の再考」日本語文法学会第26回大会口頭発表
- Potts, Christopher. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Roberts, Craige. 2012. Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics* 5(6):1–69. Reprinted from Jae-Hak Yoon and Andreas Kathol, eds., (1996) *Papers in Semantics: Ohio State University Working Papers in Linguistics*, vol. 49.
- 澤田美恵子. 2007. 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- Sawada, Osamu. 2012. The Japanese contrastive *wa*: A mirror image of EVEN. In *Proceedings of Berkeley Linguistic Society* 33, 374–387.
- 寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版
- Tomioka, Satoshi. 2010. Contrastive topics operate on speech acts. In C. Fery and M. Zimmermann, eds., *Information Structure from Theoretical, Typological and Experimental Perspectives*, 115–138. Oxford: Oxford University Press.
- Tonhauser, Judith, David Beaver, Craige Roberts, and Mandy Simons. 2013. Toward a taxonomy of projective content. *Language* 89(1):66–109.